

CKJSだより

第54号

校長 松平 昭二

shoji_matsudaira@hotmail.co.jp

カーナビ人生

以前は、知らないところへ行くときは、地図をにらみながら道路標識や特徴ある建造物に注意を払い、帰る際の道筋を頭に叩き込むなど必死の運転でした。

カーナビを使用すると便利です。住所を入力して、矢印のまま進めばいいわけですし、ご丁寧にもポイントでは音声が表示してくれます。また、道を間違えても、そこからのルートが再び示されます。

しかし、カーナビはリアルタイムの情報ではないために、現実の変化と差が出てきます。しばしば、画面ではあることになっている〇〇がなくなっていたり、高速道路が延長されているのに、画面や音声は「次で降りてください」と指示したりします(最近のiPhoneはそのようなことはありませんが)。

もし、人生にこのようなナビゲーションがあったらどうなるかと想像してみました。



目的(地)は「外交官」です。セット完了。案内開始。「まずA小学校を直進です」「次はB中学校をのぼり、……C大学をくぐります。」「約〇〇年の道のりです」……。

あれ! これはすでに親が自分の子どもに行っていることではないでしょうか? 親がナビのごとく画面・音声で示し、目的地のセットさえもしてくれる。子どもはそれに従うだけだから楽でしょう。でも、自己決定のない人生なんてつまらない。また、現実と画面が異なった場面に出くわしたらどうするのでしょうか。戸惑うに違いありません。第一、ナビが途中で動かなくなったらどうするのでしょうか……。などと考えてしまいます。

親だけでなく、自省を込めて振り返ってみると、教育に携わるものがナビまがいなことをしていないでしょうか。私も、つつい子どもたちに対して「指導」とか「助言」などのつもりで、ナビまがいになっていたのではないかと今更ながら冷や汗が出てきます。

子どもの人生はその子自身のものであり、人生行路の分岐点では子ども自身の選択と自己決定を支援するのが教育者の立場であることを、カーナビは教えてくれました。日頃の我が子に対する接し方を振り返ってみることも大切ですね。